

つくば学生農業ヘルパー

「食と農林漁業大学生アワード 2019」応募書類



つくば学生農業ヘルパーとは？

つくば学生農業ヘルパーは、現在つくば市周辺の14軒の農家・法人にヘルパーとして働きに行く有志の学生団体です。ヘルパーの労働には賃金が支払われます。農家はヘルパーをれっきとした作業の一員として頼っているため、つねに全力で作業に取り組みます。かつては農業ヘルパー派遣会社と名乗っていましたが、あくまで学生と農家を繋げ、連絡や会計の業務をするのが運営の役割であるため、利潤を目的とした企業ではありません。

農業ヘルパーの仕組み

現在、農業ヘルパーには14件もの派遣先があります。この派遣先から代表は随時、依頼を受け付けます。並行して、ヘルパー(登録している学生)からもシフト希望日を受け付けます。この2つを調整し、ヘルパーは指定された派遣先に当日行って作業をすることになります。

賃金は時給(850円)で一人一人正確に計算され、会計が一元的に集金・受け渡しをします。ただし農家と学生の取引を代行しているのみであり、当然850円満額がヘルパーの手に渡ります。



派遣先は、すべて園芸作物の農家であり作業のほとんどは野菜の生産に関わるものです。取り扱う作物は非常に多岐に渡ります。

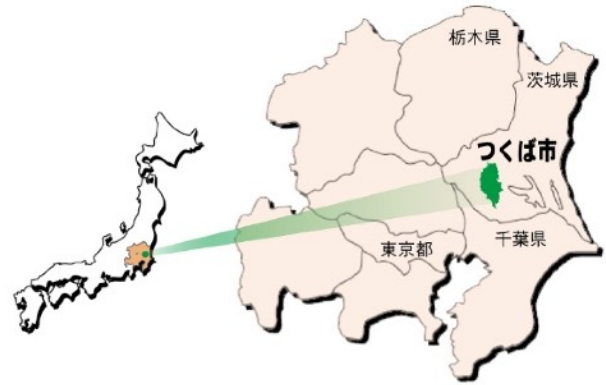
つくば市と周辺地域では、豊富な土地と大消費地に近い立地から都市近郊型の園芸農業がさかんに行われています。また、数多くの直売所があるのもこの地域の特徴です。派遣先の生産者も多くが直売所への出荷をメインの販路としています。直売所での販売は農家の手取り分が多い反面、生産だけでなく調製・選別・包装までを生産者が一元的に行わなくてはなりません。さらに継続的に直売所に商品を出し、収入を得るためにはどうしても品目数が多くなります。このことから忙しい直販農家は、どうしても頻繁に人手不足に悩まされることとなります。つくば学生農業ヘルパーは、そのようなつくばの農業に適応した地域密着型のシステムです。

卒業生の進路

設立以来、毎年数多くの学生が農林水産分野の仕事に就いています。また、就職後に地元で独立して農家となり生計を立てているものも少なくありません。さらに、なかには農業ヘルパーの派遣先である生産者の所で研修生となったり、従業員となり農業に携わっている卒業生も複数おられます。これらは当団体が長年に渡って農家と良好な関係を保ち、多くの学生に門戸を開いて農業経験の場を提供してきたことによる最も大きな成果です。

設立の経緯

2000年の12月、当時筑波大学の生物資源学類2年次であった河口宗央氏を中心に5人の学生によって立ち上げられたのが「農業ヘルパー派遣会社」でした。最初の派遣先の農家は1件のみでした。それ以来、規模を拡大しつつも地道に地域の農業に貢献してきました。2009年に「つくば学生農業ヘルパー」と改名しています。



つくば市の位置(つくば市ホームページ<https://www.city.tsukuba.lg.jp/shisei/joho/profile/>より)

当初目標として掲げられたのは、多くの学生に農業に触れる機会を提供し、魅力を伝えることでした。

現在私たちは、次のことを目標として団体を運営しています。

つくば学生農業ヘルパーの目標

- 一、実際に働くことでしかふれられない「現場の農業」を学ぶ。
- 一、農家を支え地域に貢献する。
- 一、農家さんと交流するなかで社会経験を積む。
- 一、多様な学生が農業に触れる機会を作る。
- 一、学生ひとりひとりの未来に経験を活かす。
- 一、日本の農業と社会の発展にアプローチする。



援農の活動をしている団体は、日本全国に多数存在します。そのなかで当団体のもっとも大きな特色が「賃金が発生していること」「派遣回数多さ」です。ここではこの2つについて、詳しく紹介したいと思います。

学生でいわゆる援農をして、お金をもらっているのかと他の学生に驚かれることも、笑われることもあります。なぜ無償ボランティアではなく、有償なのか？ここには2つの理由があります。

一つ目の理由として、農林水産業は、人間の食料をつくる営みとして特別視されがちですが第一次産業というように、れっきとした産業です。農家であれ法人であれ、多くの生産者は利潤を目的とした活動、つまりビジネスとしてあるわけです。そこに携わるものとして、たとえプロではない学生とはいえど労働に対してはきちんと対価が支払われてしかるべきだという考えが私たちにはあります。農業が産業として自立するためには、ボランティアではなく、適正な賃金を支払われたスタッフが必要です。

二つ目の理由は、活動の持続性と質の向上という目的です。多数の農家と契約し、それぞれの農繁期に安定的に人手を確保するためには学生がヘルパーとしての活動を長く続けられるようにすることが必要です。ヘルパーの多くは、学業と並行してヘルパーとして活動することで収入を

得、生活費などに充てています。こうして畑で働くことが生活の一部になっているヘルパーは作業にたくさん入れるだけでなく、農作業の知識と経験に富み、作業を効率的に進めることができます。

派遣回数について、つくば学生農業ヘルパーは、一年365日通して契約農家からの依頼を受け付けています。学生は学業が本分ですから派遣できない日ももちろんありますが、早朝、授業が始まる前の時間帯での収穫シフトなども駆使して極力絶え間ない派遣を行っています。たとえば2019年の1月～8月末の243日間のうち、一切の派遣が行われなかったのは合計23日のみでした。つまり、243日のうち220日はヘルパーの誰かが畑に出ていることになります。農家にとっては「いつでも頼める」、学生にとっては「いつでも入れる」。この2つを両立、マッチングすることで充実した派遣体制を構築しています。



今後の展望

つくば学生農業ヘルパーはこれまで19年ものあいだ、生産者とともに成長しながら活動を続けてきました。その間に数多くの学生に農業の魅力を伝え、知識・経験を提供してきました。さらに地域の農業生産に貢献してきた面も多大であると自負しております。

このような学生団体が20年近くにもわたって地域の農業に貢献し、未来の農業者を育てて来られたことは1つのモデルケースと言えるのではないのでしょうか。たとえば、日本全国津々浦々の大学にそれぞれ、地域に根ざした学生農業ヘルパーが存在すれば各地の農業を、地域を活性化の一助となるのではないのでしょうか。どこでもつくばと同様に出来るわけではないですが、各地に既にある学生団体やサークルが行っているボランティア活動や援農はその基盤となるでしょう。

つくば学生農業ヘルパーが、これからも毎年安定した運営をしていくためにはどうあるべきなのか。学生のみによって、これだけの規模で人を動かし金銭の正確な管理を行うのは容易なことではありません。派遣の仕方など細かなことから、法人化など大きなスケールでの検討まで含めて日々皆で考えながら活動しています。

当団体の活動をより良いものにするため、そして全国にこの取り組みを知ってもらい、より大きなムーブメントとするためにSNSなどを使って積極的な発信を行ってきました。この「食と農林漁業大学生アワード」においても、充実した発信をするとともに多くの刺激を受けて成長したいと考えております。

2019年8月31日

文責: つくば学生農業ヘルパー代表 江原 渉